

誇り高き 女騎士、

兵たちに毎日犯され、
恋人の顔も浮かばなくなるまで

敵国で 快楽に 堕ちる

KirR

【ご注意】

本作は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧・購入はご遠慮ください。

※この作品には次の描写を含みます。

誘拐・監禁／同意のない性行為／複数名との性行為／残酷描写／妊娠

※作中の行為や思想を肯定・推奨するものではありません。

※この物語はフィクションであり、実在の国・人物・団体とは一切関係ありません。

本作品の無断転載・複製・再配布を禁じます。

誇り高き女騎士、敵国で快樂に墮ちる

く兵たちに毎日犯され、恋人の顔も浮かばなくなるまでく

K
i
r
R

鬱蒼うつそうとした森の中に、馬の蹄ひづめと鎧の音が響く。荷車が通れる程度の道は部隊が通るには狭

く、両側を挟む木が迫り来るような圧迫感を与える。

殿しんがりを務めるロゼット・ベルガルドは、馬を走らせたまま、ちらりと背後に目を向ける。

敵国であるヴォロンドの軍は、すぐそこまで迫っているようだ。

（森を抜けて橋を渡り、後方の陣と合流すれば態勢を立て直せる。……が、そこまでもつかどうか……）

ロゼットはぎゅつと手綱を握る。退却指示が出た段階で、ロゼットたちの部隊はかなり疲弊していた。今も少しずつ、ヴォロンド軍との距離は縮まっている。

果たして逃げ切れるのか。ロゼットの中に焦りが過よぎる。

そのとき、木々の向こうに光が見えた。

（出口だ……！）

部隊が一斉に森を抜ける。目の前の石橋を渡れば、後方の陣はすぐそこ……なのだが、残

念ながらそう簡単にはいかない。古い時代に架けられた橋は非常に細く、一列でしか通れない。

ロゼットは高く括った赤い髪を揺らし、後ろを振り返る。ヴォロンド軍の勢いから見て、全員が橋を渡りきる前に追いつかれるだろう。

ロゼットは腰から素早く剣を抜く。

「皆、振り返らず橋を渡れ！　ここは私が食い止める！」

「ロゼット！」

ロゼットの言葉に従わず、若い騎士の青年、エリオス・サンクレールが振り返る。

「俺も残る！」

「だが……」

「一人より二人の方が食い止められるだろ。それに……大事な恋人を一人にできないからな」

エリオスが空色の瞳を細めて笑う。ロゼットは恥ずかしさを覚えながら、敵軍を睨み剣を構える。

「ありがとう。だが……死ぬなよ」

「当然！」

ロゼットとエリオスは同時に馬を走らせる。ロゼットは森から出てきた敵兵に近づき、鎧の隙間を縫うように切り裂いた。

ロゼットたちは次々に兵をなぎ倒す。森の出口で兵を順番に相手すれば、一対一で戦っているのと変わらない。

「くそっ……女のくせに、いい気になるんじゃないか！」

そう言いながら向かってきた敵の騎士を、ロゼットは剣の一振りでなぎ倒す。その華麗な一太刀に、敵兵からどよめきが上がった。

「女のくせに……か」

ロゼットは怯^{ひる}んだ敵兵たちに、威嚇するように剣先を向ける。

「その女がなぜ殿を務めているのか……身をもって知るがいい！」

ロゼットは敵兵を倒し続けた。祖国・フィデレーヌを象徴する深緑色のマントをなびかせ、蝶のように軽やかに、そして獅子のように勇ましく戦った。そしてその美しい背中を、エリオスは守り続けた。

圧倒的な戦闘力を見せたロゼットだったが、さすがに疲労を感じ始めた。ふとエリオスを見ると、彼も険しい顔で白い息を吐いている。冬を間近に控えた冷たい風も、体力を奪う原因になっているのだろう。

（部隊はもうすぐ橋を渡りきる。だが、後方の陣と合流するまでの時間は稼ぎたいな……。しかし共にここを守るには、エリオスの体力がもちそうにない。ならば……）

「エリオス！」

ロゼットはエリオスに近づく兵をなぎ払い、彼を庇^{かば}うように立ちはだかる。

「お前は部隊と共に先に行け！」

「なっ……ロゼットはどうするつもりだ！？」

「私は残る。部隊が後方の陣と合流するまで、誰かがこいつらを足止めしなければ」

「それなら俺が……」

「もうもたないのだろう？ 剣を持つ手が震えているぞ」

「それは……」

エリオスが悔しそうに顔を歪める。ゆが柔らかな金色の髪から滴る汗も、彼が限界に近いことを伝えていた。

「でも、ロゼットを一人にはできない！」

「私なら平気だ。私の強さは、お前が一番よく知っているだろう？」

ロゼットは不敵に微笑む。それは強がりなどではなく、彼女が積んできた実績から来る自信だ。

エリオスは心配そうにしながらも、剣を鞘さやに納めて部隊に続く。

「絶対に帰ってこいよ！！ 待つてるからな！！」

ロゼットがうなずくと、エリオスは橋の向こうへ走り去る。ロゼットは馬から降り、馬に橋を渡らせ、自身は道を塞ぐように橋の上に立つ。細い橋の上は、馬では動きづらいからだ。

ロゼットはまっすぐに剣を構え、ヴォロンド軍を睨みつける。

「さあ、来い！ フイデレーヌ最強の家門・ベルガルドの力を見せてやる！！」



コッーン……コッーン……

石の壁に、硬い靴音が反響する。規則的なその音に、ロゼットの意識がゆっくりと浮上す

る。

薄暗い視界の先に、石畳の床が映る。どうやらロゼットは立った状態で、腕を頭の上で拘束されているようだ。足を動かすと、じやらりと鎖の音が鳴る。両足も拘束されているらしい。

（ここはどこだ……？ 私はなぜこんなところに……）

ロゼットは最後の記憶をたどる。たしか一人で橋に残って……

（……ああ、負けたのか）

ヴォロンド軍を一人も通さないまま、十数分が経ったところ。「そろそろ後方の陣と合流できたはず」と、ロゼットの中に安心感が生まれた。その一瞬の隙に、腹に重い一撃を食らったのだ。

（そのまま気を失い、連れ去られたのか……。なんと無様な）

ロゼットは自分の迂闊さ^{うかつ}に腹を立てる。しかし反省は後にした方がいい。なぜならここは

ヴォロンド本国——それも前線から離れた場所である可能性があるからだ。

冬が近い今の季節、石牢は相当寒いはずだ。しかしロゼットは寒さを感じていない。温かさは足元から来ているようで、床下に熱を通す機構があると考えられる。格子も高価な鉄でできており、そんな設備が前線付近の砦とりでにあるとは思えない。

（高位の捕虜を生かしておくための房……に見えるが、私にそんな設備を使う理由はなんだ？）

ロゼットが生まれたベルガルド家は、フイデレーヌ最強を誇る名門騎士の家系である。しかしロゼット自身が重要な地位に就いているわけではない。人質にするにしても、この房おおぎようを使うのは少々大仰だ。

コッーン……コッーン……

だんだんと靴音が近づいてくる。重めの音からして、おそらく男性だろう。音は左右対称で、腰に剣を差していないことがわかる。

相手が丸腰だったとしても、拘束され、剣を取られ、鎧もはぎ取られた今のロゼットでは太刀打ちできない。ロゼットは警戒を強め、鉄格子の向こうを睨みつけた。

たいまつ
松明の明かりが近づき、男の姿が露わになる。あら 見覚えのあるその顔に、ロゼットは目を見開いた。

「モーラン・サンクレール殿……！！」

黒い軍服と紫色のマントは、間違いなくヴオロンド軍のものだ。しかしその顔は、かつてフィデレーヌを代表する騎士であった、モーラン・サンクレール……エリオスの兄のものであった。

モーランは緩く巻いた黒髪を揺らし、菫色の瞳を細めて微笑む。

「やあロゼット。五年ぶりかな？ 立派になったねえ。でも、一つ訂正させてくれるかな。今の私の名は、モーラン・ヴァルノワールだよ」

その深い声も、記憶にあるモーランと同じだ。ロゼットは混乱を悟られないよう、努めて

冷静に口を開く。

「サンクレールの姓は、お捨てになったということですか？」

「そうだよ。フィデレーヌを出たときにね」

（フィデレーヌを裏切り、ヴォロンドについたという噂は本当だったのか……）

ロゼットは悔しさに眉根を寄せる。周りがなんと言おうと、ロゼットはモーランを信じていた。立派な騎士であった、ロゼットとエリオスの目標であった彼が、祖国を裏切るはずがないと。しかしその希望は、本人の手によってあっけなく砕かれた。

（……嘆いていても仕方がない。切り替えなければ）

ロゼットは気丈な顔を作り、モーランを睨みつける。

「私を捕らえた目的はなんでしょう。情報なら、どんな拷問を受けようと吐きませんよ」

「そうだろうね。ベルガルド家が拷問訓練の一つも行っていないとは、私も思っていない

よ」

（情報が目的ではないのか……？）

ロゼットが訝^{いぶか}しんでいると、モーランは鉄格子の扉を開け、躊躇^{ちゅうちよ}なく中に足を踏み入れる。松明を壁にかけ、コツコツとロゼットに近づいてくる。

そして、モーランはロゼットに腕を伸ばす。ロゼットは咄嗟^{とっさ}に距離を取ろうとするが、拘束された身では叶わない。

モーランが触れたのは、ロゼットの顎だった。ロゼットはグイと顔を上げられ、モーランの美しい顔が目の前に迫る。

「私が欲しいのは君だよ、ロゼット」

「どういう……」

次の瞬間、意味を問おうとした口が塞がれる。柔らかなそれがモーランの唇であると気づくのに、少し時間がかかった。

「……！！？」

ロゼットの頭が混乱する。ロづけなど、エリオスとしかしたことはない。モーランがロゼットに懸想^{けそう}しているなど聞いたこともないし、モーランの視線からも感じたことはない。

「んっ、んんっつっ!!」

ロゼットはなんとか離れようとするが、拘束された腕では突き放すこともできない。顔を背けようとする、モーランに後頭部をがっちり^{つか}と掴まれた。

(息、が……!)

息を鼻から吸うという発想は、混乱のあまり忘れていた。ロゼットは空気を求めて大きく口を開く。

しかしその瞬間、モーランの舌が口内に侵入してくる。歯列をなぞられ、舌をじゅるりと絡められる。結局空気は吸えず、ロゼットの目尻に涙が溜まっていく。

しばらくしてモーランが離れると、ロゼットは大きく息を吸う。戦った後ということもあり、へとへとになってしまった。

「はあ、はあ……」

「初心^{うぶ}な反応をするじゃないか。弟とはしていないのかな？」

モーランがぺろりと唇を舐める。その妖艶な所作を見ながら、ロゼットはキツとモーランを睨みつける。

「エリオスは、こんな性急なこととはしない……！」

「そうかい。ならもしかして……」

モーランが再びロゼットに触れる。その場所に、ロゼットはひゅつと息を詰めた。

「こちらはまだかな？」

モーランが触れたのは、小さく開かれた足の間……秘所を覆い隠す布だった。

ロゼットの顔が熱くなる。この反応が答えだった。

「そ、そんなところ……」

「まだなんだ。ずいぶんと慎重なお付き合いをしているんだね」

そもそもなぜモーランが、ロゼットとエリオスがつき合っていることを知っているのだろうか。エリオスが教えたのだろうか。疑問はありつつも、ロゼットは羞恥が勝り何も言えなくなる。

モーランはくすりと笑いながら、大きな手で秘所全体を撫^なでる。ロゼットの体がぴくりと跳ね、鎖がじやらりと音を立てる。

「おや、感じているのかな？」

モーランが手の力を強める。ズボンの縫い目が下着越しに敏感なところに触れ、ロゼットの下腹部に熱が集まっていく。

ロゼットは体の反応を認められず、眉間のしわをぐっと深くする。

「感じて、など……」

「その割には、腰が引けているよ」

「不快なのですよ！」

「ふふつ。本当かな？」

秘所を覆っていた手は二本の指になり、割れ目をなぞるような動きに変わる。より深く擦るような動きに、ロゼットはぐつと息を詰める。

（このまま辱められるくらいなら、舌を嚙んで死んだ方が……）

「自決はおすすめしないね」

ロゼットの心を読んだかのようにモーランが言う。ロゼットが顔を上げると、モーランは不敵な笑みを浮かべていた。

「君が参加した戦いで捕らえられたのは君だけだ。けれど、その前の戦いで捕らえられた多くの兵の存在を、忘れたわけではないよね？」

「……っ！」

ロゼットの首筋に嫌な汗が伝う。つまりモーランは、「君が自決したら、捕らえている兵を殺す」と言っているのだ。

ロゼットは悔しさに唇を噛む。ロゼットは今、完全にモーランの手のひらの上だ。

大人しくなったロゼットを見て、モーランがにこりと微笑む。その笑顔は、ロゼットたちが懂れたところと何も変わっていない。

「ふあっ!？」

モーランの空いていた方が手が、ロゼットの胸の膨らみに触れる。咄嗟に出た間抜けな声に、ロゼットは羞恥を覚えて顔を赤くする。

「かわいい声を出すじゃないか。触れられたかったのかな？」

「そんなわけ……ひうつ!」

膨らみがモーランの手に包まれ、ゆっくりと撫でまわされる。時折敏感な頂を掠め、ぴりりとした感覚が走る。

その間にも、秘部を擦る指は動き続けている。敏感な部分を探り当てられ、そこばかりを執拗に責められる。

「ふ……んっ、んんっ」

ロゼットの体がどんどん熱くなる。足に力が入らず、腕を吊られていなかったら座り込んでいたかもしれない。

「熱そうだね。脱がせてあげようか」

モーランは股に触れていた手を引つ込める。ロゼットはほっと息つくが、モーランの手が軍服の留め具にかかり、再び羞恥が込み上げてきた。

「なっ……！ おやめください！ 熱くなど……」

ロゼットの言葉をモーランが聞くはずもなく、あつという間に軍服の前が開かれる。現れた麻の肌着は、汗を吸って色を濃くしている。

肌着を捲り上げられ、さらに覆われた胸が露わになる。エリオスにも見せたことのないそこを見つめられ、ロゼットは思わず目をそらす。

「こんな潰すような巻き方をして……形が崩れてしまうよ？」

モーランはさらしに手をかける。ロゼットが制止する暇もなく、白い布がハラハラと床に散った。

「っ……!!」

小ぶりのメロンほどの大きさのものが、支えを失ってぼろんと揺れる。中心を彩る突起は、触れてほしように上に向いていた。

先ほどまでとは比べ物にならないほどの羞恥がロゼットを襲う。モーランは楽しげな笑みを浮かべ、現れたそれをまじまじと見る。

「こんなに立派なものが鎧の下に隠れていたなんて、どういう手品かな？ ふふつ。ここもピンク色で綺麗だね」

モーランが震える頂を指で弾く。途端、ロゼットの体に大きな痺れが走った。

「ああっっ!!」

その痺れが収まらないうちに、モーランが赤子のように頂に吸いつく。反対も指で捏ねら

れ、ロゼットの視界にチカチカと星が舞う。

「あつ、ああつ！　ぐ、んんつ、あつ、ああつつ！！」

（なんだこれは……！　こんなの、知らない……っ！）

ロゼットは困惑しながら口を引き結ぶ。どんな感覚であれ、過剰な反応は相手を喜ばせるだけだ。

モーランはくすつと笑い、果実の中心を舐ねぶりながらロゼットを見上げる。

「今更反応を繕っても遅いよ。君の体のことは把握した。そろそろ、こっちもかわいがって欲しいだろう？」

そう言つて、モーランはロゼットのズボンの留め具を外す。その意味を理解し、ロゼットの顔からさつと血の気が引いた。

「お、お待ちください！　そこは……！！」

ロゼットが言い終わるより早く、モーランはロゼットのズボンを容赦なく下ろす。下着も

同時に下ろされ、まわりつく外気にロゼットの体がぶるりと震える。

モーランが床に膝をつき、露わになったそこを眺める。恐ろしくて仕方がないはずなのに、ロゼットの下腹部は期待するようにキュツと締まった。

「思った通りだね。こんなに蜜を垂らして……」

モーランの指が直接割れ目に触れ、ロゼットの体が硬直する。聞こえたくちゆりという音に、ロゼットは顔を赤くする。モーランの言葉が嘘ではないと、自白しているようなものだ。

「うーん……もう少し濡らしてあげようかな。初めてだしね」

モーランはそこから手を離す。しかし安心はできないことを、ロゼットはつい先ほど学んでいる。何をしてくるのか不安に思いながら、ロゼットはぎゅつと拳をにぎった。

モーランは両手をロゼットの足の間に入れ、太ももをぐつと開かせる。広くなったそこにモーランが顔を埋め、ロゼットは琥珀色こはくの目を見開いた。

(嘘っ、そんな、まさか……!!)

ロゼットが思った通り、秘部にねっとりとした感触が這う^は。それは割れ目を押し開くと、ロゼットの中にぬるりと侵入してきた。

「ひい!!」

ロゼットは逃げようと腰を動かすが、モーランに足を掴まれ動けなくなる。熱く分厚いものは容赦なく入口を広げ、溢^{あふ}れる蜜をじゅるじゅると吸い上げる。

同時にモーランの鼻先が、小さく顔を出す突起をつつく。少し触れただけなのに、ロゼットは強い刺激を感じ、視界が白く明滅し始めた。

(なに……!!?　なんか、くる……!!)

「いやっ、あつ、あああ——!!!!」

バチンと響く衝撃と共に、ロゼットの体が打ち上げられた魚のように弓なりになる。足ががくがくと震え、下腹部がモーランの舌を締めつけるように収縮した。

「あ……あああ……あ……」

（なんだ……今のは……）

真っ白な視界の中で、ロゼットは呆然とする。痛みではない、しかし強烈な衝撃だった。その衝撃の名前が何なのか、ロゼットにはまだわからない。

モーランが舌を抜き、ロゼットの足の間から出て立ち上がる。終わったのかと、ロゼットは大きく息を吐いた。

しかしすぐに、それが勘違いだと気づく。モーランは自身のズボンの留め具を外し、前をくつろげはじめたのだ。

「え……」

さすがにその意味がわからないほど、ロゼットは無知ではない。さっと血の気が引き、逃げ出そうと足をばたつかせる。しかし鎖の長さに余裕はなく、逃げるどころか足をあげることもままならない。

モーランが下着を下ろし、中から凶器のような昂たかぶりが飛び出す。血管が浮き赤黒く輝くそれに、ロゼットは喉を引きつらせた。

「お、お待ちください！！ それだけは……！！」

「弟に悪いとは思うんだけどね。目的のためなら仕方がないさ」

モーランがロゼットの腰を掴み、濡れそぼったそこに昂りを押し当てる。ロゼットの意味に反して、そこは歓迎するようにモーランに吸いついた。

「おやめくださいモーラン殿！！ いや……いやああああああ！！！！！！！！」

ズブツ――

襲い来る異物感に、ロゼットは目を見開く。ゆつくりと押し込まれるそれは思いのほか長く、内臓を割り開いていくようだった。

「うっ、あ、あああ……っ」

「どうだい？ 破瓜はかの痛みは」

——痛い。

端的に言うなら、その一言に尽きる。しかしそれは体ではなく、心の痛みだ。

正直、想像していたほどの痛みではなかった。自分の手首より太いものを見たときは慄いたが、これくらいなら、戦場で受けた傷の方がよほど痛い。

しかし、心に受けた痛みは計り知れない。信じていた人に裏切られ、恋人に捧げるはずだった純潔を奪われたのだ。二つのものを同時に失い、ロゼットは心臓を鷲掴みにされたような気持ちになった。

（それでも……泣いてはいられない。私は誇り高き、フィデレーヌの騎士だ！）

ロゼットは眉をつり上げてモーランを睨む。モーランはその視線をもともせず、楽しげな笑みを浮かべる。

「そうでなくては。この程度に屈しては面白くない」

モーランが腰を引き、中のものがぎりぎりまで引き抜かれる。そしてまたゆっくりと挿入

され、ロゼットは圧迫感に呻く。緩慢な動きは氣遣っているとも取れるが、モーランの形を刻み込んでいるようにロゼットには思えた。

「はっ……う……ぐうつ」

痛みは徐々になくなり、固まっていた体は抵抗を諦めたように緩み始めている。だんだんと滑りが良くなり、ロゼットは体に裏切られた気持ちになる。

モーランのものが浅いところを掠めたとき、ロゼットの体に痺れが走る。びくりと腰が跳ねたのを、モーランは見逃さなかった。

「ん？　ここかな？」

「ひああっ！！」

モーランの張り出した部分が、そこを集中的に擦る。体に流れるものが快楽であること
を、ロゼットは認めざるを得なかった。

「いやあ！　そこっ、だめですう！！　あつ、いやあああつ！！！！」

「嫌というわりに、ずいぶん締めつけてくるじゃないか。体は正直だね」

ロゼットは悔しさに唇を噛む。口では何と言おうと、体は誤魔化しようがない。

そのうちに、ロゼットの中からゾクゾクとした感覚が這い出して来る。

「だめ、ですっ！　また、きちやう……！」

「イってもいいよ。女の子は何度でもイけるからね」

「いつ、ああつ、ああああ——————つっ！……！！！」

ロゼットの下腹部が大きく痙攣けいれんし、中のモーランをぎゅっと締めつける。ふわふわとする

頭は心地よく、ロゼットは自分が絶頂しているのだと、ようやく認識した。

（そんな……いやなのに、なぜ……）

乖離かいりしていく心と体に、ロゼットは苦しくなる。

放心しているうちに、ロゼットの片足から拘束が解かれ、ブーツとズボンと下着が抜き取られる。邪魔なものがなくなった足を大きく持ち上げられると、モーランの侵入がさらに深

くなつた。

「ひっ！ う、あつ、あああつっ！！」

へその下まで突き上げられ、ロゼットは苦悶くもんと快楽に呻く。早くなつた抽挿ちゅうそうに容赦はなく、ロゼットはふるふるとかぶりを振る。

「もうっ、やめ、てっ、ください……！」

「何を言っているのかな？ まだ仕上げが済んでいないじゃないか」

“仕上げ”の意味を察し、ロゼットは目を見開く。さすがに、それは受け入れられない。受け入れてはならない。

ロゼットは必死に身じろぐが、拘束とモーランによって押さえられた体に逃げ場はない。

「いや！ 嫌ですモーラン殿！！ それだけはあ！！」

ロゼットがどれほど喚こうと、モーランは聞く耳を持たない。速度を増した抽挿が、その答えだった。

「いやつ、やめて!! あつ、ああ、あああ——!!!!!!」

ドブツ——

ロゼットの奥に、熱いものが放たれる。じわじわとモーランとの隙間を埋めるそれに、ロゼットは頭が真つ白になった。

「あ……あああ……」

(だされ、た……)

ロゼットの頭に、エリオスの姿が浮かぶ。ほのかに頬を赤らめた笑顔が、ひび割れて砕け散った。

ロゼットの中から、柔らかくなったモーランのものが引き抜かれる。中を埋めるものはなくなっただけなのに、温かさは消えない。

モーランはロゼットの足を下ろすと、ズボンを履かせないまま足を拘束する。自分だけ身なりを整え、壁にかけていた松明を手取る。

「なかなか悪くなかったよ。それじゃ、また明日」

モーランはロゼットに背を向け、格子の扉を閉めてあつさりと立ち去る。遠くなる足音を聞きながら、ロゼットは静かに涙を流した。



周囲がほんのりと明るくなり、ロゼットは目を覚ます。藁わらを敷き詰めただけの寢床は硬いが、案外よく眠れた。この程度の硬さなら、野営と大差はない。

体を起こすと、手足を縛る鎖がじやらりと音を立てる。目に映る自分の体は何も纏まとっておらず、そういえば全て脱がされたのだったとロゼットは思い出す。

鉄格子の向こうを見ると、松明を掲げたヴォロンド兵の男の姿がある。装飾からして、さほど高い階級ではない。